

# 聖徳大学蔵 三条西実隆筆『百人一首』の翻刻と紹介

松本 麻子

## Reproducing and Presenting Sanjōnishi Sanetaka Version of the *Hyakunin Isshu* Held by Seitoku University

MATSUMOTO, Asako

### 要旨

聖徳大学の所蔵する古典籍に三条西実隆(1455～1537)自筆と伝わる『百人一首』がある。この実隆本『百人一首』は古筆了音の極札があり、実隆の自筆本と思しい。『百人一首』の最古写本は文安2年(1445)の書写奥書を持つ堯孝筆本で、他にも古いものに『百人一首』注釈書『百人一首宗祇抄(百人一首抄)』があり、姉小路基綱(1441～1504)筆とされる斯道文庫本として伝わる。吉海直人の『百人一首年表』によると、実隆本『百人一首』は『百人秀歌』から数えても5番目に古い写本とされるが、これまで言及はされなかった。本稿では実隆本『百人一首』の写真を掲載し、全文を翻刻する。また、主要な『百人一首』諸本と校合し、実隆本の性格を示し、また『実隆公記』からその成立を考察した。結果として、享禄4年(1531)7月17日に書写された可能性を示した。

### キーワード

百人一首, 三条西実隆, 実隆公記, 堯孝

### Abstract

Seitoku University holds a *Hyakunin Isshu* manuscript, the text of which was putatively transcribed by Sanjōnishi Sanetaka (1455–1537). The transcription was most likely performed by Sanetaka given that the manuscript comes with a certificate of authenticity (known as a *kiwame-fuda*) by Kohitsu ("connoisseur of calligraphy") Ryō'on. A similarly early version of the *Hyakunin Isshu* is the Gyōkō version, which includes a shosha-okugaki (a note containing information about the transcription) specifying the date of the transcription as Bun'an 2 (1445). Another early version is the *Hyakunin Isshu*, an annotated version by the poet Sōgi. A number of other transcriptions of the *Hyakunin Isshu* were produced in the Kamakura period or Muromachi period. However, such transcriptions are few in number. Thus, the Sanetaka version is valuable because it is an early transcription and because it clearly specifies the scribe. This article presents scans of Sanetaka's transcription of the *Hyakunin Isshu* and reproduces the text. It also compares the text with key versions of the *Hyakunin Isshu* and examines Sanetaka's diary, titled Sanetaka Kōki, for insights into the circumstances behind the transcription. As a result, we estimated that the manuscript may have been copied on July 17, 1531 (Kyōroku 4).

### Key words

*Hyakunin Isshu*, Sanjōnishi Sanetaka, Sanetaka Kōki, Gyōkō

## はじめに

聖徳大学の所蔵する古典籍に三条西実隆(1455～1537)自筆と伝わる『百人一首』がある(整理番号W3516, 以下、実隆本とする)。実隆本には古筆了音(1674～1725)の極札が付され、実隆自筆の他書と比較しても実隆の筆で疑うところはないようだ(本稿の画像参照)。周知のように現存する『百人一首』の最古写本は文安2年(1445)の書写奥書を持つ堯孝筆本で、これは『詠歌大概』との合写本である。近年、久保木秀夫は堯孝筆本より古い京極高秀(?～1391)を伝称筆者とする『百人一首』の断簡を紹介しており<sup>1</sup>、「室町時代初期頃以前には、『一首』という秀歌撰がやはり成立していたのみならず、ある程度は流布していたとみてよさそう」<sup>2</sup>と指摘するが、室町初期までに

書写された『百人一首』の完本は確認されていない。

吉海直人は『百人一首年表』<sup>3</sup>にて、堯孝本に続く古写本を一覧にし、「八」番目に本稿の実隆本を載せる(〔伝本〕として、以前の所蔵者である吉田幸一の名が記載されている)。最古の堯孝本は年表の4番目に記載されており、『百人秀歌』(『年表』では3番)から数えても、実隆本は5番目に古い<sup>4</sup>。久保木秀夫・木村孝太の調査<sup>5</sup>によれば、伝承も含む『百人一首』本文のみの写本について「実際に『鎌倉期写本』『室町期写本』などとして掲出されるのは、単純に数えて二〇点のみである」とする。

『百人一首』注釈書として最初に成立した宗祇の『百人一首宗祇抄(百人一首抄)』があり、古いものに姉小路基綱(1441～1504)筆とされる斯道文庫本が伝わる<sup>6</sup>。基綱は実隆と同時

代の歌人として知られ、『新撰菟玖波集』の清書を担当するなど、実隆や宗祇に近い人である。小川は「現存最古写本の一つであり、かつ宗祇生前でもあるので、享受史上重要な伝本」と述べる。このような注釈書を含めると室町時代に書写されたと思われる『百人一首』は20本よりももう少し数も増えるが、それらを加えても実隆本が有力な古写本の1つであることは疑いが無い。

後述するが日記『実隆公記』を見ると実隆は度々『百人一首』を書写していることがわかる。これまで『百人一首年表』で存在だけは知られていたものの、内容は紹介されなかった実隆本は、今後の調査研究に欠かすことのできない一本となるに相違ない。そこで、本稿では全体の写真を掲載し、全文を翻刻し、実隆本についての考察を試みることにしたい。

## 1. 実隆本『百人一首』の書誌と翻刻

実隆本『百人一首』の書誌は、次のとおりである。

### 【書誌】

整理番号W3516。列帖装一帖。表紙、改装後布張鳥花文様、縦16糎×横17糎。外題、なし。内題、「百人一首」。見返し、後補金紙草花文様。遊紙、前一丁。料紙、楮紙。行数、10行、和歌2行書。全16丁。書き入れナシ。奥書などナシ。「古筆了音極」の包み紙に、極札「西三條逍遙院実隆公 百人一首 一冊 印「琴山」」、裏に「秋の田の六半 癸巳六 印」。この印は「増補和漢書画古筆鑑定家印譜」（斯道文庫蔵・BK-KOM-000009-0000）等によると了音のもの。なお、全体の写真は巻末に示した。

### 【実隆本『百人一首』翻刻】

旧字も忠実に翻字したが、見やすさを考慮し改行は示していない。1～100の番号は稿者が付した。

#### 百人一首

天智天皇

1. 秋の田のかりほの庵のとまをあらみわか衣手は露にぬれつ、  
持統天皇
2. 春過ぎて夏きにけらし白妙のころもほすてふ天の香く山  
柿本人麿
3. 足引の山鳥のおのしたりおのなかへし夜をひとりかもねん  
山邊赤人
4. たこの浦にうちいて、みれは白妙の富士のたかねに雪はふりつ、  
猿丸大夫
5. おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時そ秋はかなしき  
中納言家持
6. かさ、きのわたせる橋にをく霜のしろきをみれは夜ぞ深にける  
安倍仲磨
7. あまの原ふりさけみれはかすかなるみかさの山に出し月かも  
喜撰法師

8. わかいほは都のたつみしかそすむ世を宇治山と人はいふなり  
小野小町
9. 花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなめせしまに  
蟬丸
10. これやこの行もかへるも別てはしるもしらぬもあふさかの関  
参議篁
11. わたのはら八十嶋かけてこき出ぬと人にはつけよあまのつり舟  
僧正遍昭
12. 天つかせ雲のかよひち吹とちよとめのすかたしはしと、めむ  
陽成院
13. つくはねの嶺よりおつるみな川の恋そつもりてふちとなりぬる  
河原左大臣
14. みちのくの忍ふもちすり誰ゆへにみたれそめにし我ならなくに  
光孝天皇
15. 君かため春の野にいて、わかなつむわかころも手に雪はふりつ、  
中納言行平
16. 立わかれいなはの山のみねにおふる松としきかはいまかへりこん  
業平朝臣
17. 千はやふる神代もきかず立田河からくれなゐに水く、るとは  
藤原敏行朝臣
18. 住のえのきしによる波よるさへや夢のかよひち人めよく覧  
伊勢
19. 難波かたみしかきあしのふしのまもあはて此世をすくしてよとや  
元良親王
20. わひぬれは今はたおなし難波なる身をつくしてもあはむとそ思  
素性法師
21. 今こむといひしはかりになか月のあり明の月を待いてつる哉  
文屋康秀
22. 吹からに秋の草木のしほるれはむへ山かせをあらしといふらん  
大江千里
23. 月みれは千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと  
菅家
24. このたひはぬさもとりあへず手向山紅葉のにしき神のまにへ  
三條右大臣
25. 名にしおは、あふさかやまのさねかつら人にしられてくる  
よしもかな  
貞信公
26. をくら山みねの紅葉、こ、ろあらはいま一たひのみゆきまたなん  
中納言兼輔
27. みかのはらわきてなかる、いつみ川いつみきとてか恋しかるらむ  
源宗于朝臣
28. 山さとは冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは  
凡河内躬恒

29. 心あてにおらはやおらむはつ霜のをきまとはせるしら菊の花  
壬生忠岑 藤原道信朝臣
30. あり明のつれなく見えしわかれよりあかつきはかりうき物はなし  
坂上是則 右近大将道綱母
31. 朝ほらけ在明の月とみるまでによしの、さとにふれるしら雪  
春道列樹 儀同三司母
32. 山川に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉なりけり  
紀友則 大納言公任
33. 久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらむ  
藤原興風 和泉式部
34. 誰をかもしる人にせんたかさこの松もむかしの友ならなくに  
紀貫之 紫式部
35. 人はいさこゝろもしらす故郷は花そむかしの香に、ほひける  
清原深養父 大貳三位
36. 夏の夜はまたよるなから明ぬるを雲のいつこに月やとるらむ  
文屋朝康 赤染衛門
37. 白露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉そちりける  
右近 小式部内侍
38. わすらるゝ身をは思はすちかひてし人の命のおしくもあるかな  
参議等 伊勢大輔
39. あさちふのをのゝしのはらしのふれとあまりてなとか人の恋しき  
平兼盛 清少納言
40. 忍ふれと色に出にけりわか恋は物やおもふと人のとふまで  
壬生忠見 左京大夫道雅
41. 恋すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか  
清原元輔 権中納言定頼
42. ちきりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松やま浪こさしとは  
権中納言敦忠 相模
43. あひみての後の心にくらふれはむかしは物もおもはさりけり  
中納言朝忠 大僧正行尊
44. 逢事のたえてしなくは中々に人をも身をもうらみさらまし  
謙徳公 周防内侍
45. あはれともいふへき人はおもほえて身のいたつらに成ぬへきかな  
曾祢好忠 三條院
46. 由良のとをわたる舟人かちをたえゆくゑもしらぬ恋の道かな  
恵慶法師 能因法師
47. 八重むくらしけるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり  
源重之 良暹法師
48. 風をいたみ岩うつ波のをのれのみくたけて物をおもふころかな  
大中臣能宣朝臣 大納言経信
49. みかきもり衛士のたく火の夜はもえひるはきえつゝ物をこそおもへ  
藤原義孝 祐子内親王家紀伊
50. 君かためおしからさりしいのちさへなくもかなとおもひぬる哉  
藤原實方朝臣 権中納言匡房
51. かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを  
源俊頼朝臣
52. あけぬれはくるゝ物とはしりなから猶うらめしき朝ほらけかな  
右近大将道綱母
53. なけきつゝひとりぬる夜のあくるまはいかに久しき物とかはしる  
儀同三司母
54. わすれしの行末まではかたければけふをかきりの命ともかな  
大納言公任
55. 瀧のいとはたえて久しく成ぬれと名こそなかれて猶きこえけれ  
和泉式部
56. あらさむ此世のほかのおもひ出にいま一たびの逢事もかな  
紫式部
57. めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな  
大貳三位
58. ありま山みなのさゝはら風ふけはいてそよ人をわすれやはする  
赤染衛門
59. やすらはてねなまし物をさ夜深てかたふくまでの月をみし哉  
小式部内侍
60. 大江やまいく野のみちのとをければまたふみもみすあまの橋立  
伊勢大輔
61. いにしへのならのみやこの八重桜けふ九重にほひぬるかな  
清少納言
62. 夜をこめて鳥のそら音ははかるともよにあふさかの関はゆるさし  
左京大夫道雅
63. 今はたゝおもひたえなんとはかりを人つてならていふよしもかな  
権中納言定頼
64. 朝ほらけ宇治の川霧たえへにあらはれわたる瀬々の網代木  
相模
65. うらみわひほさぬ袖たにある物を恋にくちなん名こそおしけれ  
大僧正行尊
66. もろともにあはれとおもへやまさくら花よりほかにしる人もなし  
周防内侍
67. 春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそおしけれ  
三條院
68. 心にもあらて此世になからへは恋しかるへき夜はの月かな  
能因法師
69. 嵐ふくみむろの山のもみち葉はたつ田の河の錦なりけり  
良暹法師
70. さひしさに宿を立出てなかわれはいつくもおなし秋のゆふ暮  
大納言経信
71. 夕されは門田のいな葉をとつれてあしのまろやに秋かせそ吹  
祐子内親王家紀伊
72. 音にきくたかしのはまのあたなみはかけしや袖のぬれもこそすれ  
権中納言匡房
73. 高砂のおのへのさくらさきにけり外山のかすみたゝすもあらなん  
源俊頼朝臣

74. うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとはいのらぬ物を  
藤原基俊
75. 契をきしさせもか露をいのちにてあはれことしの秋もいぬめり  
法性寺入道前関白太政大臣
76. わたの原こさいて、みれは久かたの雲るにまかふおきつしらなみ  
崇徳院
77. 瀬をはやみ岩にせかるゝたき川のわれても末にあはんとそ思  
源兼昌
78. あはち嶋かよふ千とりのなく聲にいく夜ねさめぬすまの関もり  
左京大夫顕輔
79. 秋風にたなひく雲のたえまよりもれいつる月の影のさやけさ  
待賢門院堀河
80. なかゝからん心もしらすくろかみの乱れて今朝は物をこそ思へ  
後徳大寺左大臣
81. 郭公なきつるかたをなかむれはたゝあり明の月そのこれる  
道因法師
82. おもひわひさても命はある物をうきにたえぬは涙なりけり  
皇太后宮大夫俊成
83. 世中よみちこそなけれおもひいる山のおくにも鹿そなくなる  
藤原清輔朝臣
84. なからへは又この比やしのはれむうしと見し世そ今は恋しき  
俊恵法師
85. 夜もすから物おもふ比はあけやらぬねやのひまさへつれなかりけり  
西行法師
86. なけゝとて月やは物をおもはするかこちかほなるわかなみた哉  
寂蓮法師
87. むら雨の露もまたひぬ榎の葉に霧たちのほる秋の夕暮  
皇嘉門院別當
88. 難波えの蘆のかりねの一夜ゆへ身をつくしてや恋わたるへき  
式子内親王
89. 玉の緒よたえなはたえねなからへはしのふることのよはりもそする  
殷富門院太輔
90. 見せはやなをしまのあまの袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす  
後京極摂政前太政大臣
91. きりへすなくや霜夜のさ簾に衣かたしきひとりかもねん  
二條院讃岐
92. 我袖はしほひにみえぬおきの石の人こそしらねかはくまなし  
鎌倉右大臣
93. 世中はつねにもかもななさこくあまの小舟のつなてかなしも  
参議雅経
94. みよしのゝ山の秋風さ夜ふけてふるさとさむく衣うつなり  
前大僧正慈圓
95. おほけなくうき世の民におほふ哉わかつ袖に墨そめの袖  
入道前太政大臣
96. 花さそふ嵐の庭の雪ならてふり行物は我身なりけり

- 権中納言定家
97. こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくや藻しほの身もこかれつゝ  
従二位家隆
98. 風そよくならのを川のゆふくれは御祓そ夏のしるしなりける  
後鳥羽院
99. 人もおし人もうらめしあちきなく世をおもふゆへに物おもふ身は  
順徳院
100. もゝしきやふるき軒はのしのふにも猶あまりある昔なりけり<sup>7</sup>

## 2. 実隆本『百人一首』の考察〈校異〉

久保木秀夫は『百人一首』について、「室町時代末期乃至は江戸時代初期あたりをひとつの区切りとしての、古写本・古版本を対象とした幅広い伝本調査や本文調査が為されたことが、おそらく一度もなかったらしい」<sup>8</sup>と指摘する。そして『百人一首』本文は「個別具体的には意外と違いが存するのである」とし、本文調査の必要性を指摘する。近年は木村孝太が『『百人一首』主要伝本翻刻集成稿』<sup>9</sup>で主要な諸本14本の校合結果を載せている。そこで本稿も先行研究に倣い、実隆本が現存するどの本文に最も近いのか、という点を確認していきたい。紙面の都合もあるため、細かい異同は本稿の翻刻を確認頂くとして、以下に注意すべき異同箇所のみ挙げた。

対象とした諸本は、『百人秀歌』<sup>10</sup>、『百人秀歌』を『百人一首』の配列に並べ替えた『異本百人一首』<sup>11</sup>などを含む木村孝太の論考14本に、前述した姉小路基綱筆『百人一首宗祇抄』を加え15本とした。それぞれの略号は、秀（『百人秀歌』）、紹（国文学研究資料館蔵『三部抄』天正18年〈1590〉写）、尊（『尊円百人一首』<sup>12</sup>）、為（伝藤原為家筆本『小倉山さうしきわか』<sup>13</sup>）、堯（宮内庁書陵部蔵堯孝筆『百人一首』）、常（跡見学園女子大学蔵伝東常縁筆『自讃歌 百人一首』）、宗（宮内庁書陵部蔵宗祇筆模写『百人一首抄』）、雅（久保田淳蔵伝飛鳥井雅親筆『百人一首』）、恵（国文学研究資料館蔵堯恵筆『百人一首』延徳4年〈1492〉奥）、姉（姉小路基綱筆『百人一首宗祇抄』）、素（宮内庁書陵部蔵東素珊筆『百人一首』）、兼（宮内庁書陵部蔵兼載筆『小倉山庄色紙和哥』慶長11年〈1606〉奥）、肖（跡見学園女子大学蔵牡丹花肖柏筆『百人一首』）、庵（東洋文庫蔵素庵筆『百人一首』<sup>14</sup>）、冷（冷泉家時雨亭文庫蔵『百人一首』<sup>15</sup>）である。

13. なりぬる…紹、尊、為、素

他本は「なりける」

36. いつこ…紹、尊、宗、雅、恵、姉、素、肖

他本は「いつく」<sup>16</sup>

43. 物も…秀<sup>17</sup>、紹、常、宗<sup>18</sup>、雅、素、兼、肖、冷

他本は「物を」

49. 大中臣能宣朝臣…紹、尊、堯、常、雅

他本は「朝臣」ナシ

50. おもひぬる…秀、紹、尊、常、庵



他本は「おもひける」<sup>19</sup>

53 右近…雅

他本は「右大将」

55. (瀧の) いと…紹, 常, 庵

他本は「おと (をと)」

57. 月かな…秀, 紹, 尊, 為, 常, 宗, 姉, 素, 肖, 冷

他本は「月かけ」

68. 此 (この) 世…紹, 尊, 為, 常, 恵, 庵

他本は「うき世」

85. あけやらぬ…秀, 紹, 為, 堯, 常, 宗<sup>20</sup>, 雅, 恵, 姉, 素, 兼, 肖, 庵, 冷

尊のみ「あけやらて」

95. 慈圓…秀, 紹, 尊, 為, 宗, 恵, 姉, 兼, 肖, 庵, 冷

他本は「慈鎮」

以上、諸本との比較を試みたが、挙げた11箇所異同のうち10箇所一致したのが天正18年写の紹巴筆『異本百人一首』である。尊円本・伝常縁筆本も7つ一致し注意される。一方で、『百人秀歌』は5つ、最古写本の堯孝本とは2つしか一致しない。久保木秀夫も堯孝筆『百人一首』は「なかなか特異な本文を持った伝本」<sup>21</sup>と指摘する。結果からも、実隆本は『百人秀歌』や堯孝本とは別系統の一本であると言える。

53番の「右大将道綱母」を「右近大将道綱母」とする本文は伝飛鳥井雅親筆『百人一首』のみだが、雅親本と一致する箇所は5つで、実隆本と類似するとは言えない。10番の「これやこの」は伝常縁本や雅親本などは「別れつつ」の本文を持っており実隆本とは一致しない。結局、現存する古写本のうち、実隆本とまったく同じ本はない。今後『百人一首』の注釈書を含め、『百人一首』諸本の調査を広く継続する必要があるだろう。

### 3. 実隆本『百人一首』の考察〈書写年代〉

次に実隆本がいつ書写されたかについて検証したい。『実隆公記』<sup>22</sup>には『百人一首』に関する記事が散見される。最も早いものは明応5年(1496)11月1日の記録である。

東隣御料人外題共所望、伊勢物語・百人一首・白讀  
哥・新撰菟玖波集〔上中下〕 染筆了

「東隣御料人」は正親町三条実望室。実望は実隆の東隣に居を構え両者は頻繁に行き来した。実望室は駿河守護職今川義忠の娘。ここでは、『百人一首』等の「外題」のみ染筆している。

永正元年(1504)5月4日条には、「摂州倚玉庵清藏主所望色紙五十枚百人一首  
端五十首 染筆」とある。「倚玉庵清藏主」は禅僧と思しい。この人物が所望したものは色紙であり、本書とは一致しない。ただし、色紙形式で『百人一首』が書写されている点は注意される。

永正7年(1510)8月27日条には「百人一首書之、新典侍局所望也、終功則献之」とある。「新典侍局」とは庭田雅行の娘

で後柏原院内侍源子(行子)。後柏原との間に仁和寺に入った覚道法親王ら3子をもうけた。

永正17年(1520)には、8月19日・20日・9月3日条とまとまった記事が見える。

8月19日 百人一首哥今日書了

8月20日 百人一首歌書之、表紙事申付之

9月3日 百人一首歌遣千葉介妻者也

19日に書写を終えた『百人一首』に表紙を付け、これを「千葉介妻」に送っている。千葉介は関東の武家千葉守胤のことで、『再昌草』には同年9月2日の詞書に「千葉介守胤百首歌詠みて合点の事申すとて、包み紙に歌侍し」(3854)<sup>23</sup>とあり、実隆と千葉介夫妻との交流が知られる。明応5年、永正7年の記事と同様、女性の求めに応じて書写している点が注目される。

大永5年(1525)4月1日には「(堺)光明院所望」の「百人一首色紙」を新墨にて立筆し、6日に書き終えている。堺光明院は現在の大阪府堺市にある寺で、前年の大永4年5月1日には「光鎮といふ者、連歌興行すべきよし頻に申侍しかば、光明院にて一座ありしに」(再昌草・4634)とあり、実隆は光明院にて肖柏・宗碩らと連歌を行っている。大永5年10月12日には「姉小路伝之百人一首銘所望、書遣之」とある。実隆のもとに持ち込まれた「姉小路伝之百人一首」は、どのような本かはわからない。持ち込んだ人物は姉小路基綱の子の済継ではなく(永正15年(1518)没)、孫の済俊(1506~1527)である。実隆は「銘」を書いたとあるので、書写はしていない。

翌大永6年8月25日に『百人一首』を「立筆」し、翌26日には書き終えている。27日には「百人一首遣周桂」とあり、連歌師周桂に渡している。これは、28日条に

千々石三郎源尚員肥前国住人也。先度来、周桂同宿在京云々、百人一首彼者所望云々、奥書所望問書遣之、唐枕持来、自愛也。

とあり、千々石三郎源尚員が所望したものと判明する。千々石紀員(ミゲル)の父に肥前国釜蓋城主の直員がいるが、別人。ただし、この一族の者であることは確かだ『再昌草』(5079)には、

廿八日、肥前国住人、千石三良源尚員唐枕携来し、やがて臥してみたる心よく侍しかば、戯に思ひ続けし

やわからかに寝ぬる物かな夢にてもかかる手枕いつかふれけんかかる枕はいつかふれけん  
と記している。

享祿2年(1529)1月14日には「得月ト云者百人一首所望、堅海苔一袋送之」とある。25日「百人一首色紙送之」とあるが、こちらは得月に依頼されたものではない。同年2月7日条には「能州」つまり能登守護畠山義総に「百人一首色紙四十枚書之」とあり、同年の紙背「周桂書状」(3月18日~20日裏)には、

宗碩所望(中略)色紙百人一首

得月申 百人一首 丸分ヤス川下向之時可遣之

2月13日条には「百人一首色紙太守所用紙 宗碩所望」とある。つまり、この時期、宗碩経由で畠山義総に色紙を、得月に冊子を書写していたのである。得月の所望した冊子は享禄2年10月3日によく「染筆」し、10日に「百人一首得月所望終書功」、享禄3年2月18日に仲介役の「安川来之間」のため、「得月百人一首同遣之」という首尾となった。

享禄4年(1531)7月17日条にも「百人一首終書功」とあり、20日に「百人一首表紙事申付経師」とある。24日に

越前所望色紙詩歌等数枚・百人一首和歌小双紙書之、表紙申付経師昨日到京、未下 皆以遣甘黄、副書状了

とある。「越前」は朝倉孝景のことで、実隆は孝景の和歌に合点をし、この17日のこととして『再昌草』(解題933)に、

朝倉彈正左衛門孝景卅首歌合点事申侍し、墨付て返すとて、奥に書付たりし、十八日遣伊治了

染めをきし程やいかなる思ふにもあまりて深き露のことの業

とある。この『百人一首』は「色紙詩歌等数枚」と共に、実隆のいところで朝倉とも関係の深かった甘露寺元長の子伊長(「甘黄」)経由で孝景に送られた。この記事のみ本の大きさが「小双紙」と記されている。「小双紙」は小さい草紙といった意味で、特に大きさは決められていないようである。本書は縦16糎×横17糎のいわゆる枅形本で一、堯孝本が縦23.8糎、横16.5糎、姉小路基綱筆『百人一首宗祇抄』が縦23.6糎、横16.3糎であることから、実隆本を「小双紙」と呼ぶことも可能ではないか。本書はこの朝倉孝景に送られた『百人一首』の可能性が高いことを指摘しておきたい。

## おわりに

『実隆公記』を見ると、15世紀の終わり頃から実隆周辺でも『百人一首』への関心が高まっていることがわかる。このことは、堯恵筆『百人一首』が延徳4年(1492)の奥書を持ち、『百人一首宗祇抄』を姉小路基綱(1441～1504)が書写したと矛盾しない。実隆は『百人一首』を5回書写しているが、そのう

ち2本は後柏原院内侍源子と千葉守胤妻の女性に送られ、3本は千々石三郎源尚員・得月・朝倉孝景といった地方在住の者であった。僅かな資料からも『百人一首』の享受層の一端が見えて来る。小川剛生は『百人一首宗祇抄』について、「新しく和歌を学んでみたいと希求する武士、それも地方国人クラスの希望にに応じていたことが察せられる」<sup>24</sup>と指摘する。『百人一首』注釈のみならず、『百人一首』も和歌を学びたいという層に享受され、実隆はその求めに応えた様子が窺える。本稿で紹介した実隆本もその一本であることを示し、結論としたい。

- 1 久保木秀夫「伝京極高秀筆『百人一首』断簡 付、「高秀」印の捺された古写本もう一点」(『研究と資料』第八十四輯, 2021年12月)
- 2 久保木秀夫「『百人一首』『百人秀歌』の伝本と本文」(『百人一首の現在』2022年10月, 青簡舎)
- 3 『百人一首年表』(1997年, 青裳堂書店)
- 4 年表では堯孝本の次に、伝東常縁筆本(跡見学園女子大学蔵本)、伝足利義尚筆本(吉田幸一所蔵本)、伝飛鳥井雅親筆本(久保田淳蔵本、『鑑賞日本の古典古今和歌集 王朝秀歌選』1982年, 尚学図書)の4本が載る。ただし、伝足利義尚筆本は現在、確認されていない。
- 5 久保木秀夫・木村孝太「付、『百人一首』要調査伝本一覧抄」(『百人一首の現在』前掲)
- 6 小川剛生『百人一首宗祇抄 姉小路基綱筆』(2018年, 三弥井書店)
- 7 底本「利」か。「れ」とも読めるがこの異同を持つ他本はない。
- 8 「『百人一首』『百人秀歌』の伝本と本文」(前掲)
- 9 「日本大学大学院国文学専攻論集」第19号, 2023年2月。
- 10 冷泉家時雨亭文庫編『五代簡要・定家歌学』(1996年, 朝日新聞社)
- 11 吉海直人「百人秀歌型配列の異本百人一首について」(『和歌文学研究』第61号, 1990年10月)
- 12 『画入尊円百人一首』(1994年, 和泉書院)
- 13 『百人一首 為家本尊円親王本考』(1999年, 笠間書院)
- 14 新版『百人一首』(2019年, 角川ソフィア文庫)
- 15 冷泉家時雨亭文庫編『百人一首 百人一首注 拾遺(三)』(2017年, 朝日新聞社)
- 16 『百人秀歌』は「いつく」。
- 17 『百人秀歌』は「物を」。
- 18 宗祇筆『百人一首抄』は「物も」。
- 19 「おもひける」の形を持つ本には漢字表記の「思ひける」「思ける」も含む。
- 20 「ぬ」とある。
- 21 「『百人一首』『百人秀歌』の伝本と本文」(前掲)
- 22 引用は、『実隆公記』(高橋隆三校訂, 1980年, 続群書類従完成会)による。
- 23 古典ライブラリー「日本文学Web図書館」データベースを使用。引用に際し、読みやすさを考慮し、踊り字などを修正して引用した。
- 24 小川剛生「百人一首の「発見」ー頼阿から宗祇へー」(就実大学吉備地方文化研究所編『人文知のトボス』, 2018年, 和泉書院)

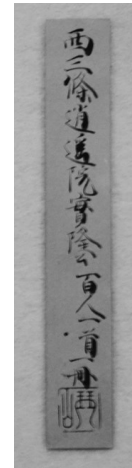
〈表紙 刺繍〉



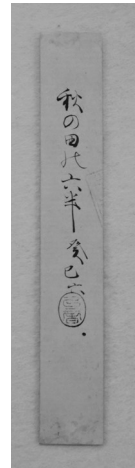
〈裏表紙 刺繍〉



〈極札 表〉



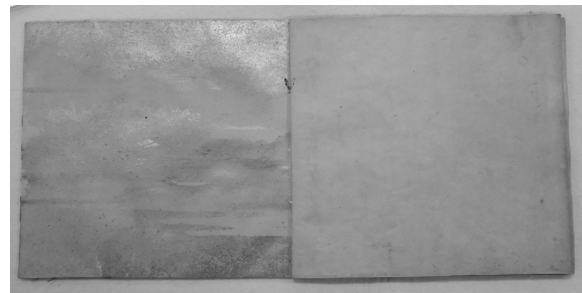
〈裏〉



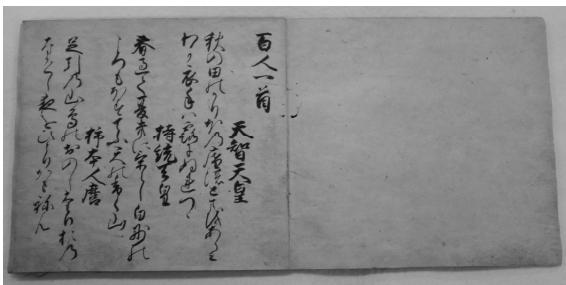
〈見返〉



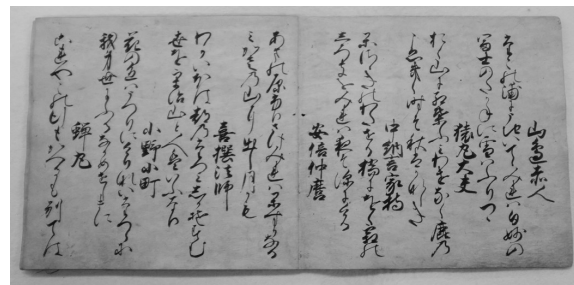
〈裏見返〉



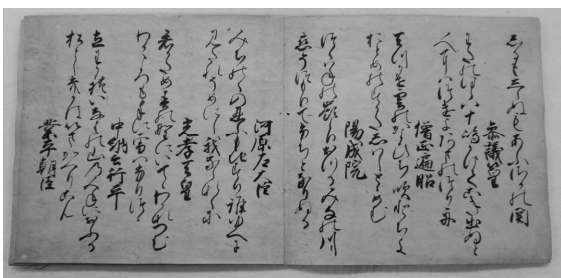
〈1丁オ〉



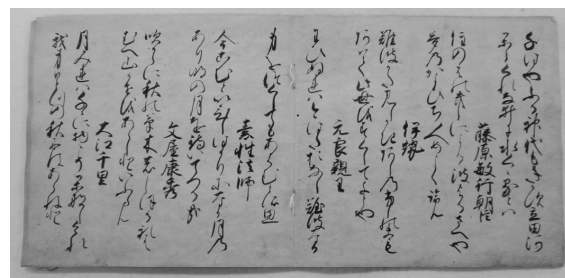
〈1丁ウ・2丁オ〉



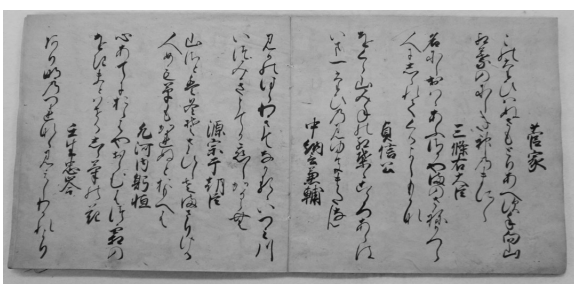
〈2丁ウ・3丁オ〉



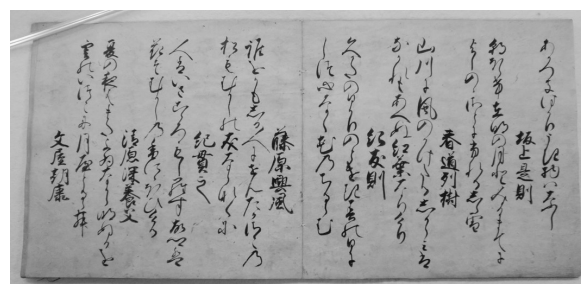
〈3丁ウ・4丁オ〉



〈4丁ウ・5丁オ〉

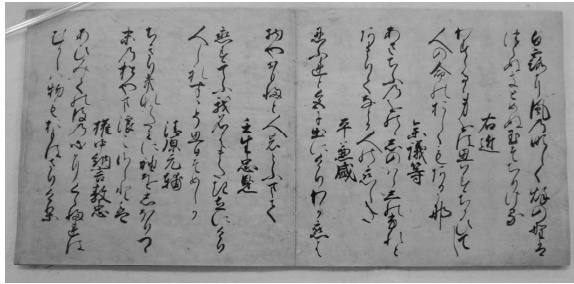


〈5丁ウ・6丁オ〉

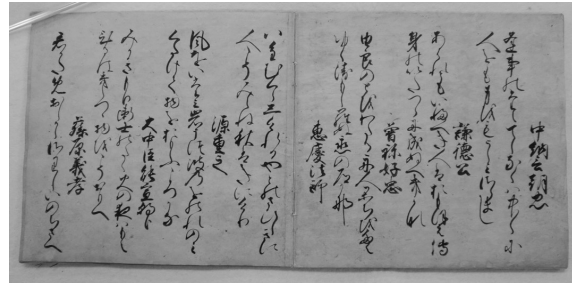




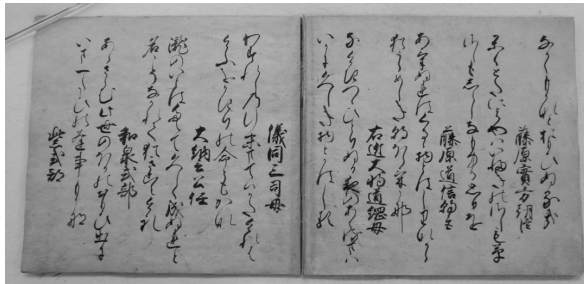
## 〈6丁ウ・7丁オ〉



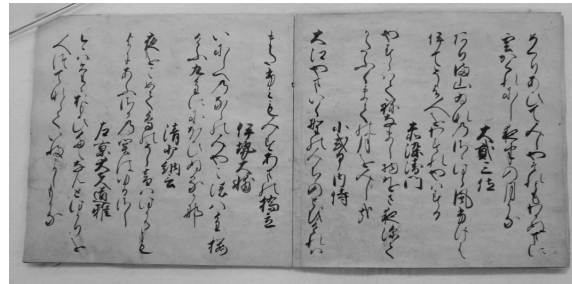
## 〈7丁ウ・8丁オ〉



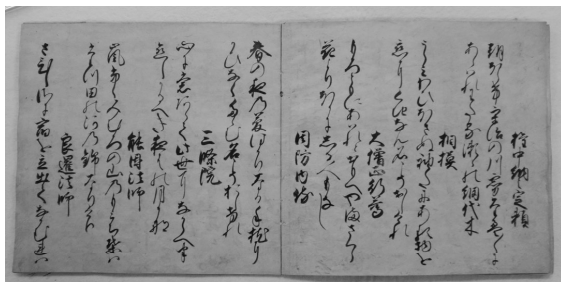
## 〈8丁ウ・9丁オ〉



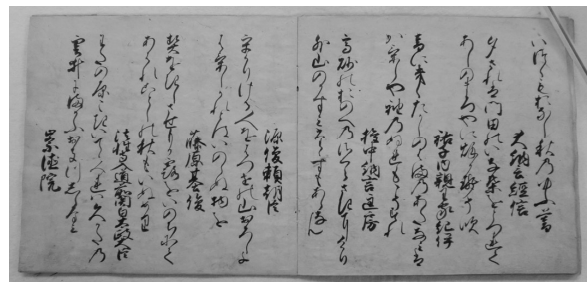
## 〈9丁ウ・10丁オ〉



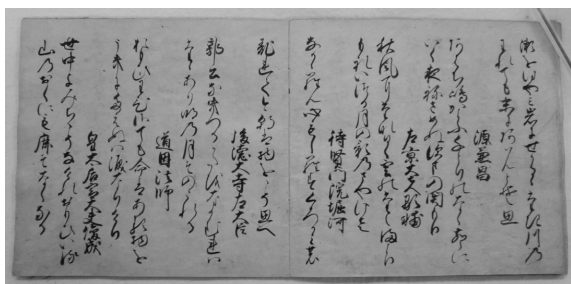
## 〈10丁ウ・11丁オ〉



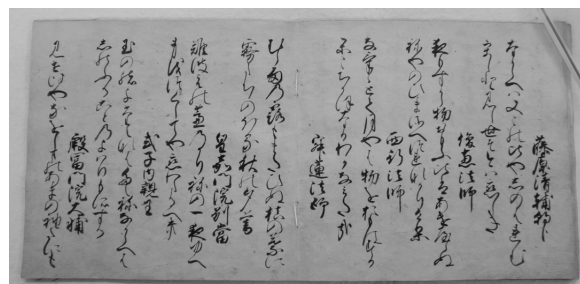
## 〈11丁ウ・12丁オ〉



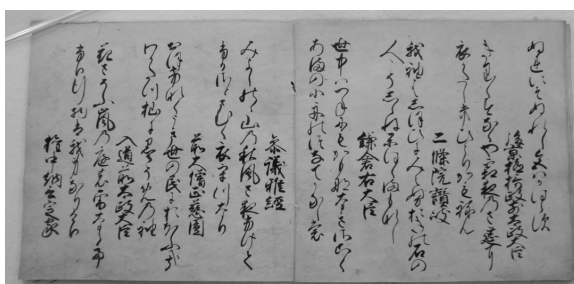
## 〈12丁ウ・13丁オ〉



## 〈13丁ウ・14丁オ〉



## 〈14丁ウ・15丁オ〉



## 〈15丁ウ・16丁オ〉

